

本当に大丈夫なのか「あきたこまちR」

秋田県が全量転換へ

放射線育種米巡る動きに注視

「あきたこまち」に国が育成したカドミウム低吸収品種「コシヒカリ環1号」を交配し、得られた「あきたこまちR」に全量転換するという佐竹秋田県知事が方針を打ち出した。これに対して様々な意見が飛び交っている。佐竹知事は慎重な姿勢をみせていたが、一転して全面的に切り替える方針を表明。本当に安全なのか、消費者の健康に問題ないのかという議論が噴出している。宮城県では最初に動いたが取り止めた。兵庫県の生活協同組合では反対声明を出している。輸出振興というが、オーガニック志向の海外から一部の遺伝子を破壊する放射線育種が受け入れられるのかも疑問である。このことを知らない方も多いのも事実。あなたは賛成？反対？どちらでしょう。健康を重視し、自然農を推進している日本豊受自然の由井寅子代表は問題点10を挙げて異を唱えている。

下、骨格異常など様々な体調不良につながります。マンガンの1日の目安量は、男性で4mgですが、そのうち白米(こはひん)からの摂取量は50%ほどになります(一杯150g×4杯÷100g×0.35mg=2.1mg)。「白米に含まれるマンガンは元々少ないから影響はない」と主張されている人がいますが間違っています。主食であるごはんがマンガンを不足させることは、人口減少に繋がる大問題です。

問題点3 汚染地域はそれほど多くない。カドミウム基準値である0.4ppmを超えるお米は秋田県で年約400トン発生しますが、これは秋田県の生産量の0.1%です。さらに全国では約1000トン発生しますがこれは0.01%です。汚染地域だけ低カドミウム吸収米に切り替えれば済むはずなのに、全量をマンガン欠乏米に転換するのはやり過ぎではないでしょうか。

問題点4 農家が自家採種できない。コメのOSN(有機)遺伝子を重イオンビームによって破壊されたコメは、登録品種として品種登録されているため、2022年から施行された改正種苗法によって、農家が自由に自家採種し種を備蓄する権利が、遂に主食のコメでも奪われる時代が到来したのかもしれない。しかも登録品種です。しかも登録品種を、許諾なく自家採種したら農業法人では最大3億円の罰金と懲役刑にも問われます。

問題点5 重イオンビームが使われている。放射線育種は、60年前からある技術で安全が確認されていると自然の変異と同じであると主張される人がいますが、これは間違いです。あきたこまちRは、従来のカドミウム線よりもはるかに強力な重イオンビームを使って遺伝子を破壊させて得られたコシヒカリ環1号と掛け合わせて作られた品種です。ガンマ線と重イオンビームでは遺伝子の破壊力が桁違いに異なります。一緒に議論することはできません。重イオンビームは染色体にクラスター切断を誘発し複数のDNA断片を形成し、逆位や転座、大規模な欠失が生じやすく、自然の変異とはかけ離れています。

問題点6 交雑による異種遺伝子の汚染が広がる。コメのOSN(有機)遺伝子を破壊された「あきたこまちR」が実際に栽培されると、交雑によって異常遺伝子の汚染が広がり、将来正常な遺伝子のコメが失われる可能性も考えられます。これは「あきたこまちR」以外のコメの農家にとって死活問題です。

問題点7 選択権が失われる。品種名の表示義務がないため「あきたこまちR」に切り替えても、銘柄名「あきたこまち」として販売されてしまえば、これは明らかに食品表示システムの欠陥です。

問題点8 あきたこまちRは、EU有機原則ではORGANICにならないのに、日本ではJAS有機認定される方向にある。「EUなどにも有機農産物として輸出できる」と主張されている人がいますがこれは間違いです。欧州基準ではORGANICと認められない放射線・重イオンビームを照射しての突然変異を利

問題点10を挙げ異を唱える

自然農推進の由井代表



あきたこまちRの問題点を唱える由井代表

秋田県では、2025年より「あきたこまち」を放射線育種米である「あきたこまちR」に全量転換しようとしていますが、それに対し、由井寅子代表が10の問題点をあげ解説し、解決策も提案した記事が環境農業新聞令和5年9月号に掲載されました。

再度、要点十補足して説明します。

問題点1 栄養不足 「あきたこまちR」は、重イオンビーム照射による育種米(コシヒカリ環1号)とあきたこまちの交配による新品種でコメのOSN(有機)オーガニクス・エヌ・ランプ・ファイン(遺伝子が破壊されているため、カドミウムが吸収されないだけではない)で、必須微量ミネラルのマンガンが十分吸収できなくなる致命的な欠陥を抱えています。

実際、宮城県では「ひらめ1号」交配種への採用に最初に動いていますが、栽培試験で収量が上がり取り止めた経緯があります。切り替え検討の際もリスクを想定して一部導入から検討していました。

またマンガンの不足により、ごま葉枯病等が出やすいため、マンガンを不足した食べものを食べ続けること、不妊、生殖機能低下、骨格異常など様々な体調不良につながります。

問題点2 日本中のコメがマンガンを不足させることになる大問題です。コメは元々少ないから影響はない」と主張されている人がいますが間違っています。主食であるごはんがマンガンを不足させることは、人口減少に繋がる大問題です。

問題点3 汚染地域はそれほど多くない。カドミウム基準値である0.4ppmを超えるお米は秋田県で年約400トン発生しますが、これは秋田県の生産量の0.1%です。さらに全国では約1000トン発生しますがこれは0.01%です。汚染地域だけ低カドミウム吸収米に切り替えれば済むはずなのに、全量をマンガン欠乏米に転換するのはやり過ぎではないでしょうか。

問題点4 農家が自家採種できない。コメのOSN(有機)遺伝子を重イオンビームによって破壊されたコメは、登録品種として品種登録されているため、2022年から施行された改正種苗法によって、農家が自由に自家採種し種を備蓄する権利が、遂に主食のコメでも奪われる時代が到来したのかもしれない。しかも登録品種を、許諾なく自家採種したら農業法人では最大3億円の罰金と懲役刑にも問われます。

問題点5 重イオンビームが使われている。放射線育種は、60年前からある技術で安全が確認されていると自然の変異と同じであると主張される人がいますが、これは間違いです。あきたこまちRは、従来のカドミウム線よりもはるかに強力な重イオンビームを使って遺伝子を破壊させて得られたコシヒカリ環1号と掛け合わせて作られた品種です。

問題点6 交雑による異種遺伝子の汚染が広がる。コメのOSN(有機)遺伝子を破壊された「あきたこまちR」が実際に栽培されると、交雑によって異常遺伝子の汚染が広がり、将来正常な遺伝子のコメが失われる可能性も考えられます。これは「あきたこまちR」以外のコメの農家にとって死活問題です。

問題点7 選択権が失われる。品種名の表示義務がないため「あきたこまちR」に切り替えても、銘柄名「あきたこまち」として販売されてしまえば、これは明らかに食品表示システムの欠陥です。

問題点8 あきたこまちRは、EU有機原則ではORGANICにならないのに、日本ではJAS有機認定される方向にある。「EUなどにも有機農産物として輸出できる」と主張されている人がいますがこれは間違いです。欧州基準ではORGANICと認められない放射線・重イオンビームを照射しての突然変異を利

問題点9 あきたこまちRを全量転換してもカドミウム対策としては不十分である。日本は火山国でもともと土壌のカドミウム値は高く、鉱山開発などで土壌が広くカドミウム汚染され長年放置されてきました。そのため食品の基準値を設定して人体のカドミウム蓄積を抑える受身の対策だけでは不十分です。カドミウムはコメ以外からもタバコやナッツ類、魚介類などからも摂取され、蓄積されます。積極的な解決策としては、カドミウムのデトックス対策があります。お奨めは重金属や有害物質の体外への排出に秀でた欧州発祥の自然療法ホメオパシー(同種療法)の活用です。

またホメオパシーに基づく、食事でインナーチャイルド癒しを含む「ZENホメオパシー」がカドミウム対策として必要であると考えています。

「ZENホメオパシー」では、カドミウムに限らず、水銀や農薬、ワクチンやクソの害など様々なデトックスに有効です。ぜひ試してみてください。

■カドミウムの霊性的役割(私の導師からの情報)

カドミウムは地球にとって、地球の動きをよくするヒタミシ(針)の頭の回転がよくなるようなもの。カドミウムによって地球の意識がよくなる。よい考



秋田県種苗交換会協賛の機械化ショーは大勢の人で賑わう